

| | |
|--------------|---|
| Title | 日欧経済学者の概念メタファー使用の比較 |
| Author(s) | Miles, Neale |
| Citation | 言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 57-64 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/69961 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

経済学ではメタファーが顕著で、重要な役割を果たしている。中心的な経済概念（「成長」や「市場」、「景気循環」など）は全てメタファーである。メタファーが経済学に浸透しているため、これまで認知メタファー理論（CMT）の分野で、数多くの研究者が経済に関するディスコースで使用されているメタファーを研究している（Alejo, 2010; Boers, 2000; Charteris-Black and Ellis, 2001; Herrera-Soler and White, 2011 など）。

しかし、これまでの認知メタファー理論（CMT）研究に補足すべき点は、英語と日本語の経済メタファーの比較が少なく、異なる経済主義者が使用するメタファーの比較も少ないという点です。本論文は John Maynard Keynes と Friedrich August von Hayek、宇沢弘文、西山千明という4人の経済学者が使用したメタファーを比較することで、経済主義と言語が経済メタファーの使用に与える影響を考察する。

Keynes、Hayek、宇沢、西山の業績と主義

イギリス人経済学者 John Maynard Keynes (1883-1946)は非紙幣市場の総供給量と総需要量が常に一致するという古典経済学の「セイの法則」に反論し、「供給量が需要量に制約される」と主張した人物である。需要量は常に不安定であり、生産や雇用、インフレーションなどに影響を及ぼすため、政府の財政政策や中央銀行の金融政策で安定させるべきだと訴えた。イギリスとアメリカの1920年代の恐慌時に、最低賃金を高い水準に設定し、雇用と投資、生産性を拡大させるために政府投資を増やせる経済政策を提唱し、恐慌の緩和に貢献した。現在、Keynesと同様に政府投資を通して経済回復を図るべきと主張する人は「ケインズ主義者」（Keynesians）と呼ばれている。

一方、Friedrich August von Hayek (1899-1992)はノーベル経済学賞を入賞したオーストリア学派の経済学者であり、経済的自由主義（libertarianism）の代表的な人物である。Hayekは経済政策が個人の意思決定を優先させるべきだと主張し、市場経済制度や生産手段を企業と個人が私有することを支持し、政府による介入に反対した。また、財の価格は人間の価値観で決定されると主張した。第1次世界大戦後、オーストリア社会に悪影響を与えたインフレーションを経験した Hayek は Keynes の投資政策が長期的に市場に悪影響を与え、インフレーションにつながると論じ、政府投資の引き下げと市場の放任の必要性を訴えた(Wapshott, 2011)。2人の間で1930年代に行われた議論は未だに有名であり、2008年の世界金融危機（「リーマンショック」）の際に、経済回復のための政策を巡る議論でケインズ主義と経済的自由主義の主張が話題になった。

宇沢弘文（1928-2014）は数理経済学の分野で意思決定理論、2部門成長モデル、不均衡動学理論などの研究を行った日本人経済学者であった。経済研究を通して医療、教育、地球環境などの社会問題の解決に取り組んだ。1950～60年代、アメリカのスタンフォード大学、カリフォルニア大学バークレー校、シカゴ大学で経済学教授を務めた。その時代に Keynes の代表作『The General Theory of Employment, Interest and Money』の執筆に貢献した元ケンブリッジ大学大学院生である Joan Robinson や Richard Kahn らに出会った。宇沢はそれを機にケインズ経済学を学び、『ケインズの「一般論」を読む』と題した本などで、ケインズ経済学が現代の経済へどのように貢献できるかを解説している。宇沢は厳密な「ケインズ主義者」ではなかったが、Hayek らの市場放任経済を強く批判し、政府規制により「社会的共通資本」（つまり、人々の生活を安定させ、豊かにする自然環境や人々の健康、文化など）の管理と保護の必要性を訴えた。

西山千明（1924-2017）は理論経済学と紙幣論、経済哲学、人的資本論を専門とする経済学者であった。シカゴ大学で Hayek の指導の下で経済的自由主義を学び、博士課程を修了した。Hayek の研究や経済的自由主義者である Friedman の研究の日本語訳を監修し、日本人に経済的自由主義を紹介した人物として知られている。また、西山自身も経済的自由主義研究で業績をあげている。西山は Hayek と同様にインフレーションを問題視し、インフレーションを加速させるとされるケインズ主義的な政府投資政策や計画経済を強く批判し、市場のメカニズムに委ねる経済の必要性を訴えた。

研究目的と方法

本論文の目的は、Keynes と Hayek、宇沢、西山の経済研究において使用される概念メタファーを分析し、比較することである。研究方法として、この4人の著作物から概念メタファーの例を収集し、それぞれの学者が概念メタファーをどのように使用したかを分析し、比較した。本論文では、特に興味深い3つの起点概念領域のみ取り上げ、詳しく分析した。その3つは〈生物〉と〈病気・治療〉、〈機械〉である。

〈生物〉

Adam Smith や François Quesnay など、経済学の先駆者は経済を生物、特に人間に喩えることが多くある。有名な例として、Smith は英国の貿易路を「great blood-vessel」（大血管）(Smith, 1776: VI.7.129)として描写した。Smith らの影響で、現代の経済学者も頻繁に〈生物〉メタファーを使用している。中心的なメタファーの一つは経済や産業の拡大を「生物の成長」に喩えるメタファーである。その例として、Keynes は新しい産業を「infant industries」（幼稚産業）と呼び、Hayek は産出の拡大を「matur[ing]」（成長すること）に喩えた：

- (1) In the same way, the theoretical concessions which free-trade economists have been ready to make in contemporary controversies, relating, for example, to the encouragement of **infant industries** or to the improvement of the terms of trade, are not concerned with the real substance of the mercantilist case.
(Keynes, 1936: 194.)
- (2) We assume in other words that any quantity of input applied at a moment of time will result after a fixed interval in a definite product at another moment of time, and that input is applied, and consequently output **matures**, continuously at a constant rate.
(Hayek, 1941: 114.)

また、Keynes は欧州を「肉体」として喩え、英国を「of her flesh and body」（肉体の一部）ではないと述べている：

- (3) England still **stands** outside Europe. Europe's voiceless tremors do not reach her. Europe is apart and England is not of her **flesh and body**.
(Keynes, 1920: 3.)

Hayek は Keynes が影響を与えた固定為替相場体制である「ブレトンウッズ体制」への批判で、インフレーションを「虎」に喩え、インフレーションに頼って経済成長を図ることを「虎のしっぽに掴まること」に喩えた：

- (4) We now have a **tiger by the tail**: how long can this inflation continue? If **the tiger** is freed **he will eat us up**; yet if he **runs faster and faster** while we desperately hold on, we are *still* finished!
(Hayek, 1971:126)

このように、Hayek は Keynes と対照的に、動物を「飼育する」相手ではなく、「不安定で危険な相手」として描写した。

身体部位も経済のメタファーに使用されている。例えば、Hayek は生産手段の所有者を「a single hand」（一つの手）と呼んでいる。これはシネクドキ（提喩）の例である：

- (5) If all the means of production were vested in a single **hand**, whether it be nominally that of "society" as a whole, or that of a dictator, whoever exercises this control has complete power over us.
(Hayek, 1944: 108.)

「hand」が使用されている重要な経済用語の一つは Adam Smith が『Wealth of Nations』（国富論）(1776)で提案した「invisible hand」（見えざる手）である。「invisible hand」理論とは、消費者や企業が自己の利益を求めて行動するが、社会全体に利益を与える行動を選ぶように「invisible hand」（つまり、市場の力）が働いているという理論であり、市場の影響を「hand」で表す〈人体〉メタファーの例である。例えば、個人は自分の利益を求めて職業を選ぶが、需要の高い職業の方が給料が高いため、社会が必要としているその職業を選ぶ傾向がある市場の放任を支持する Hayek は「invisible hand」理論に賛成し、このメタファーを使用した：

- (6) The uncomprehending ridicule later poured on [Adam Smith's] expression of the '**invisible hand**' by which 'man is led to promote an end to which was no part of his intention', however, once more submerged this profound insight...

(Hayek, 1967: 99)

Keynes は政府投資の必要性を訴えていたため、Keynes の論文では「invisible hand」理論への言及がなかったのであろう。

一方、宇沢は経済的自由主義者である Demsetz の「共有地制度」を解説した際、「見えざる手」について述べている：

- (7) 共有地制度のもとでは、市場のメカニズムが十分に働くことができないのであって、私有化することによってはじめて、アダム・スミスのいう市場の「見えざる手」が働くことができるというのである。

(宇沢, 2016: 210)

しかし、後に Demsetz の主張に反論し、社会のルールで規制され、過剰に利用されない共有地（コモンズ）の例をいくつか挙げている。宇沢は「見えざる手」の力が働いている市場が自然破壊や公害問題につながると主張した。上記の例のように経済的自由主義を批判するために「見えざる手」を使用したと考える。

宇沢も経済を「生物」に喩えることが多かった。特に、下記の例から分かるように、「社会的共通資本」を保護して充実させる経済や社会を「人間的」なものとして描き、自然破壊や生活環境への被害を及ぼす経済活動を扇動させる自由経済を「非人間的」なものとして描写した：

- (8) 社会的共通資本は、いつの国ないし特定の地域に住むすべての人々が、豊かな経済生活を営み、優れた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持することを可能にするような社会的措置を意味する。

(宇沢, 2016: 412)

- (9) 自動車メーカーは自らの利益を得るためには国民の健康に大きな害毒をもたらすような売り込みをあえてして、消費者もまた安く購入できれば高公害車でもあえて選択するという点で、市場機構のもつ非人間的な性格を象徴するような事件であった。

(宇沢, 2016: 243)

これに対して、西山は Hayek と同様に、ケインズ主義的政策下の経済の「不安定性」を強調するために「生物」メタファーを使用することが多かった。Hayek はインフレーションを「虎」に喩え、西山はインフレーションと賃金上げ政策の繰り返しを「イタチごっこ」に喩えた：

- (10) ...その大幅賃上げ自身がインフレ要因となって、イタチごっこの悪循環が発生する。

(西山, 1974: 26)

また、Hayek と同様に、市場原理経済を弁護する形で「見えざる手」論に言及した：

- (11) 他方スミスは[労働分業の]問題に対する解答を、実質的には例の「見えざる手」論にかくれ[た]のかもしれない。

(西山, 1991: 131)

「イタチごっこ」は Neale (2018)でも指摘した、日本語の特有のメタファー表現であり、英語の「cat and mouse (game)」と同様の意味である。しかし、メタファーの媒体 (vehicle) である「tiger」を用いるにせよ「イタチ」を用いるにせよ、インフレーションの「不安定性」を強調していることに変わりはない。

Keynes の「動物」メタファーの使用は Hayek や西山と対照的である。Keynes が使用した「動物」メタファーの例として、ルーズベルト大統領への手紙でビジネスパーソンを「野生動物」（「狼」や「虎」など）と「飼育されている動物」に喩えたことが挙げられる：

- (12) You could do anything you like with [business people] if you treat them (even the big ones) not as wolves or tigers, but as domesticated animals by nature, even though they may have been badly brought up and not trained as you would wish.

(Keynes, 1938: 4)

ここで、Keynes は「動物」メタファーを使用することで、大統領をビジネスパーソンの「飼い主」に喩え、政府を民衆の上に位置付けており、政府の経済への影響力が大きいと訴えている。

このように、西山と Hayek は同様に「見えざる手」のメタファーを使用して市場の力を強調し、「動物」メタファーを使用してインフレーションの危険性を描写している。一方、Keynes は「動物」メタファーを使用してビジネスパーソンを「政治家のペット」に喩え、宇沢は社会的共通資

本が守られている経済を「人間的なもの」として描写している。

<病気>・<治療>

<病気>メタファーでは、経済が「生物」に、経済問題が「病気」に、問題の解決が「治療」に喩えられている。分析対象としている4人の経済学者が共通して使用しているが、それぞれの学者の経済の考え方がメタファーの使用方法に現れている。

下記の Keynes による例では、<病気>メタファーを使用して、経済後退による企業の倒産を「死ぬこと」に喩えており、経済問題を解決することを、<治療>メタファーを用いて「経済の健康を回復させること」(restoring economic health and strength)に喩えている。これらのメタファーを用いて、経済問題を解決するための具体的な行為（特に投資）の必要性を訴え、経済学者と政治家は経済を治す「医者」として含意している：

(13) Thus if the animal spirits are dimmed and the spontaneous optimism falters, leaving us to depend on nothing but a mathematical expectation, enterprise will **fade and die**;
(Keynes, 1936: 103)

(14) it is the simultaneous pursuit of these [interest rate and national investment] policies by all countries together which is capable of **restoring economic health and strength** internationally
(Keynes, 1936: 217)

経済的自由主義者である Hayek も<病気>と<医療>のメタファーを使用し、経済学者や政治家を「医者」に喩えたが、下記の例のように、ケインズ主義を批判する際に投資、金融政策を「問題を悪化させる効果のない治療」と描写した。

(15) It should be specially noted that monetary policy cannot provide a real **cure** for this difficulty except by a general and considerable inflation, sufficient to raise all other wages and prices relatively to those which cannot be lowered.
(Hayek, 1944: 213)

(16) Then Lord Keynes assured us that we had all been mistaken and that the **cure** could be **painless and even pleasant**: all that was needed to maintain employment permanently at a maximum was to secure an adequate volume of spending of some kind... The cause of the decline of the demand for capital goods must... be sought elsewhere than in a deficiency of final demand, and may even be an excessive final demand. All the **fashionable remedies**... not only fail to touch the root of the matter but may even **aggravate the problem**.
(Hayek, 1971: 152)

以上の例から分かるように、<治療>メタファーは能動的な投資政策の描写で使用される傾向がある。Keynes は投資政策を支持して<治療>メタファーを使用しているが、Hayek はそういった政策の批判で使用している。

宇沢は Keynes と同様に、経済問題を「病気」に喩え、経済学者を「病気の診察をする医者」として描写した：

(17) その間に、アメリカ経済は、インフレーションと失業—いわゆるスタグフレーション—の慢性化、都市問題の悪化、貧困の一般化という国内的な諸問題に加えて、国際収支の赤字、為替レートの不安定化など国際的な次元でも対処すべき問題が拡大化していた。それにもかかわらず、アメリカ・ケインジアンはなかから、これらの問題提起に対して適切な処方箋は出されなかった
(宇沢, 2016: 137)

しかし、上記の例では、宇沢はケインズ主義者がスタグフレーションなど、80年代に先進国を取り巻いた経済問題に対して適切な「診断」を出さなかったとし、その影響で経済的自由主義が普及したと論じている。宇沢はインフレーションを問題視し、Keynes が求めた積極的な政府投資を求めなかった。しかし、宇沢が最も強く主張したのは、Hayek や西山が支持した市場放任によって起こる、行き過ぎた経済活動が社会を「病気」にするということである（例えば、上記の例文(9)では、自動車メーカーの商品の売り込みが「国民の健康に大きな害毒をもたらす」というように描写している）。

西山は宇沢と同様に、経済学者を「経済の病気を診察する医師」として描写している：

(18) 個々の技術的論文が先人の壮大ではあるが隙の多い論文に比して、現実の分析や理解や診断において、はたしてより優れているかどうかは極めて疑問である。

(西山, 1974: 9)

しかし、西山は Hayek と同様に、過剰な政府投資が「経済を病気にする治療」であると考え、1970年代前半、田中政権が行った金融緩和と土地投資、マンション投資を『繁栄か没落か—忍びよる“日本病”をどう撃退するか』¹と題した本で批判した。そのような投資によって発生するインフレーションが「麻薬」と類似しているとも述べた：

(19)「少しのインフレ」、それは、麻薬も少しならかえってよいという、麻薬患者の少年に似ていた。

(西山, 1974: 28)

以上のように、Keynes、Hayek、宇沢、西山はそろって経済学者を「医者」に喩え、経済分析を「診断」とし、経済学者は医者のように経済の「病氣」を治す力があると主張している。Keynes は自分の経済主義が経済の「病氣を治す」と主張し、積極的な政府投資という「治療」を提案したが、Hayek と西山はその治療がかえって経済の病氣を「悪化させる」と主張した。宇沢は、80年代のスタグフレーション問題に対してケインズ主義者の「診断」が適切ではなかったと述べたが、一方で市場原理主義者が提案した市場放任政策こそが経済と社会を「病気にした」とも主張した。

<機械>

<機械>メタファーは経済の仕組みを機械の仕組みに喩えることで、複雑な経済概念に形や規則を与え、仕組みを明確化し、経済を「操作・修理できる物」として描写する。

古典経済学においては、<機械>メタファーが中心的な役割を果たしている。例えば、Smith (1808)では経済（そして宇宙全体）の動きが以下のように描写されている：

(20)“[The] co-existent parts of the universe are exactly fitted to one another, and all contribute to compose **one immense and connected system**”.

(宇宙の共存要素は他の要素にぴったりと嵌り、それぞれの要素が一つの巨大で接続されているシステムを構成し、そのシステムに貢献する)

(Smith, 1808 [著者訳])

上記の例から分かるように、Smith は Newton の自然分析に使用された機械の喩えから影響を受け、経済分析で同じ喩えを用いた (Milgate and Stimson, 2011: 79)。Newton の影響もあり、世界の動きを規則や接続性のある機械の動きに喩えることが科学において長年主流であり、一種の科学である経済学は例外ではない。Smith や Ricardo、Malthus、Marshall、Mill、Walras など、古典経済学に影響を与えた研究者の研究においては、<機械>のメタファーと力学的な表現（例えば「market equilibrium」（市場均衡）など）が使用されており、現代の経済学でも一般的である。

Keynes と Hayek の論文にも、<機械>メタファーの例が数多くあるが、機械の描写に明確な違いが見られる。具体的に、Keynes は下記の例から分かるように、経済を表す機械を「国が操作する (operate) もの」として描写した。一方、Hayek は、「市場」(market) を「機械」として描写し、政府が操作するようになると、機械の「efficiency」（効率）が悪くなると述べた。

(21)From being agricultural and mainly self-supporting, Germany transformed herself into a vast and complicated **industrial machine**, dependent for its working on the equipoise of many factors outside Germany as well as within. Only by **operating this machine, continuously and at full blast**, could she find occupation at home for her increasing population and the means of purchasing their subsistence from abroad.

(Keynes, 1920: II.6.)

(22)In the field of labour, as in any other field, the elimination of the market as a **steering mechanism** would necessitate the replacement of it by a system of administrative direction...If the market were thus irretrievably deprived of its function, there would be no **efficient** way of distributing labour throughout the industries, regions, and trades, other than having wages determined by authority.

¹ 1960年代、イギリスで充実した社会保障制度や基幹産業の国有化などにより発生した経済問題が「英国病」と呼ばれ、「日本病」はそれを掛けているのである。

(Hayek, 1971: 96.)

また、Hayek は「市場」を「自動的に動く機械」として描写し、その機械のメカニズムが個人の行為に影響を与え、経済を安定させると述べた：

(23) It is only thanks to the **market mechanism** that another is induced to step in and fill the gap... In fact, all those aggregate demand and supply curves with which we like to operate are... results of the **continuous processes** of the market.

(Hayek, 1971: 120)

上記のように、Keynes は経済を「政府が操作できる機械」に喩えたが、Hayek は経済を「人間が操作すると故障する、自動的に動く機械」として描写した。これはケインズ主義と経済的自由主義による経済の描写の重要な相違点である。

宇沢と西山は Keynes、Hayek と同様に「機械」メタファーを多用した。西山の「機械」メタファーの使用は、Hayek の使用と似ている。西山は Hayek と同様に自由経済を「自動的に動き、調整するもの」として描写している：

(24) ...未知の世界に対して自らを調整させる自動的な適応メカニズムを持っているもの、それこそが自由社会であり自由経済のメカニズムである。

(西山、1974: 5)

西山は「機械」メタファーを用いて、ケインズ主義を批判することもあった。下記の例では、あるケインズ主義者の主張の中の投資によって発生するインフレーションを「機械の潤滑油」というメタファーを用いて表した：

(25) 「少しのインフレは高度経済成長にとって、必要な潤滑油である」という神話が、国民一般に確信されていた。

(西山、1974: 28)

西山にとっては、経済という「機械」は自動的に調整するもので、政府からの「調整」を必要としないものであった。経済という「機械」を動かすものは「人々の力」であると考えていた：

(26) 機械的要因だけが動く原始的な物理現象とは異なり、経済現象を動かす最も基本的な要因は、それが人々の主観的判断と行為である点にこそ、その特徴が存在する。

(西山、1974: 11)

一方、宇沢は自由経済という機械の「メカニズム」を維持するために膨大なエネルギーや資源が浪費されなければならないことを問題視した：

(27) この空虚な消費生活を支えるために膨大なエネルギー、自然資源と人的資源とが浪費され、またこのような浪費がされなければ、経済循環のメカニズムが円滑に機能できなくなり、多くの失業者を生み出さざるを得なくなってしまった、というのが現代の日本経済の事情である。

(宇沢、2016: 105)

宇沢はケインズ主義者の主張の説明の中で、私的な経済活動に対する政府の介入を機械の「微調整」(ファインチューニング)に喩えている：

(28) そこで、経済循環の安定化、完全雇用、安定的経済成長というような政策目標を達成するためには、政府が私的な経済活動に対して積極的な介入を行う必要が起きてくる。いわゆるファイン・チューニングを中心とするケインズ主義の考え方が発生したわけである。

(宇沢、2016: 148)

宇沢は積極的な政府投資に慎重であったが、経済という「機械」の動きを安定化し、持続可能にするために政府による規制が必要だと論じた。

4人の経済学者が「機械」メタファーを多用したことから、力学概念が経済学研究に強く影響しており、「機械」メタファーが経済学研究において普遍的であることが分かる。また、「メカニズム」や「ファインチューニング」の例から分かるように、いくつかの英語の「機械」メタファーが日本語の経済研究でカタカナ語として使用されている。

「生物」と「病気・治療」メタファーと同様に、西山と Hayek が共通して、経済を「自動的に調整する機械」として描写し、Keynes と宇沢が共通して政府の介入を「機械の調整」に喩えた。

まとめ

Keynes と Hayek、宇沢、西山が使用した〈生物〉、〈病気・治療〉、〈機械〉の概念メタファーを比較し、メタファー使用の特徴を分析した。文化や経済主義の違いにかかわらず、4人は経済の普遍的なメタファーや、経済学の思考枠組の影響で、同一のメタファー（例えば経済成長を生物の成長に、経済問題を病気に、経済の動きを機械のメカニズムに喩えるメタファーなど）を使用する例が数多くあった。この結果から、経済学者は主義や文化が異なっても、経済を描写するために使用する認知的なプロセスと概念レベルのマッピングが非常に類似していることが分かった。

しかし、4人を比較したことで、経済主義によってメタファーの使い方が大きく変わることも分かった。例えば、〈治療〉のメタファーでは、Keynes は経済学者と政治家を「医者」として描写し、金融政策と財政政策を「経済の病気の治療」として描写したが、Hayek と西山は、Keynes が提案した政策を「経済を病気にする治療」として描写し、経済回復を市場の自動的な仕組みに任せるべきだと訴えた。一方、宇沢は市場原理主義が経済を「病気にする」とし、政府の規制をその「治療」として挙げた。

また、〈機械〉のメタファーでは、Keynes は経済を表す「機械」を「国が操作し、調整するもの」として描写し、宇沢も政府の介入を「機械の調整」に喩えたが、Hayek と西山はその「機械」を「自動的に動くもの」として描写し、政府による過剰な「操作」を批判した。

一方、2人の西欧経済学者と2人の日本人経済学者は、日本語と英語特有のメタファー表現を使用することもあった。例えば、西山は厳しい法律を多く規定した国家を「**重箱のすみをほじくる式の警察国家的雰囲気**」（1974：84）として描写し、日本の伝統的な「重箱」が含まれている慣用句を用いた。また、Keynes は経済政策を「**the wands of statesmen**」（1922: 3）と呼び、政治家を西洋のファンタジーによく登場する「杖を持った魔法使い」に喩えた。しかし、「虎」や「イタチ」の例から分かるように、〈動物〉など、同じ起点概念領域を用いて経済を描写しているが、同じ起点概念領域の中から異なるメタファーの媒体を選択することがある。言語や文化より、経済主義の方がメタファーの選択に大きな影響を与えることが本論文の分析で明らかになった。

しかし、宇沢と西山が Keynes と Hayek と同様のメタファーを使用した理由の一つは、2人が西洋経済学が日本で普及していた 20、21 世紀に活躍し、Keynes や Hayek などの西洋経済学者の研究を熟知していたからである。西洋経済学が普及する前に活躍した日本人経済学者と比較すると、大きな違いが現れる可能性がある。Keynes と Hayek の前の時代に活躍した日本と欧米の経済学者のメタファーの使用傾向の研究が今後の課題である。

参考文献

- Alejo, Rafael (2010), “Where does the money go? An analysis of the container metaphor in economics: The market and the economy”, *Journal of pragmatics*, 42, Amsterdam: Elsevier, 1137-1150.
- Boers, Frank (2000), “Enhancing metaphoric awareness in specialised reading”, *English for specific purposes*, 19(2), Amsterdam: Elsevier, 137-147.
- Charteris-Black, Jonathan and Timothy Ennis (2001), “A comparative study of metaphor in Spanish and English financial reporting”, *English for specific purposes*, 20, 249-266.
- Hayek, Friedrich August von (1941), *The Pure Theory of Capital*, Norwich: Jarrold and Sons.
- Hayek, Friedrich August von (1944), *The Road to Serfdom*, London: George Routledge and Sons.
- Hayek, Friedrich August von (1967), *Studies in philosophy, politics and economics*, London: Routledge.
- Hayek, Friedrich August von (1971), *A tiger by the tail: The Keynesian legacy of inflation*, Ludwig von Mises Institute.
- Herrera-Soler, Honesto and Michael White (2011), *Metaphor and mills: Figurative language in business and economics*, Berlin: de Gruyter.
- Keynes, John Maynard (1920), *Economic Consequences of the Peace*, New York: Harcourt, Brace, and Howe.
- Keynes, John Maynard (1922), *A Revision of the Treaty*, London: Macmillan.
- Keynes, John Maynard (1936), *The General Theory of Employment, Interest, and Money*, London: Macmillan.
- Keynes, John Maynard (1938), *Letter to President Roosevelt*, FDR Presidential Library and Museum archives.
- Neale, Miles (2018), 『経済描写における概念メタファーの日英比較』 (修士論文), 大阪大学.
- Smith, Adam (1776 [1976]), *An inquiry into the origin of the wealth of nations*, Oxford: Clarendon Press.
- Smith, Adam (1808), *The theory of moral sentiments*, 11th ed., Oxford: Clarendon Press.
- Wapshott, Nicholas (2011), *Keynes Hayek: The clash that defined modern economics*, W.W. Norton & Company.
- 宇沢弘文 (2016), 『宇沢弘文傑作論文全集』, 東洋経済出版.
- 西山千明 (1974), 『自由経済—その政策と原理』, 中公新書.
- 西山千明 (1991), 『新しい経済学—世界のための日本の普遍性』, PHP ブライテスト.